

展望のない手術だったのでは 病床の母を見舞うたびに悩む

消費税PTリーダー 山内 伸



東大和遊技場組合が主催しているヤクルト少年野球教室の時、挨拶された金田正一氏と記念撮影（平成24年12月15日）

前回、これで最後のメールにしてくださいとお願いしたにもかかわらず、執筆依頼があり、活動休止状態の消費税PTリーダーとしては何を書いてよいやら悩んでいます。

参院選は自民党の圧勝に終わり消費税増税も予定通り来年4月には8%になると思われます。消費税PTとしては5団体消費税対応ワーキングの結果待ちの状態です。

さて、何を書いてよいものやら：個人的なことで恐縮ですが、私の92歳になる母のことで考えさせられたことを綴ってみます。

現在、母は鹿児島県出水市にある病院に入院しており、見舞いに行っても、私のことを認識できていないのか解りません。入院のきっかけは、1年前の夏に通っていた特別養護老人ホームにショートステイした時、腸の異常が見つかり手術のため入院しました。1か月過ぎ退院するその日に頭痛

を訴え、検査したところ、くも膜下出血との診断で緊急手術となりました。

母は70歳の時心臓手術をし、ベースメーカーを埋め込んでいます。そのためMRI検査ができず、脳の出血は止まりましたが、脳梗塞があるかどうかが診断できず、意識混濁、言語障害、手足の麻痺が残りました。水頭症から来る障害軽減のために再度シ

ヤント手術を薦められ同意書にサインし、背中に穴を開け、髄液を腹腔内に落とす手術を受けました。結果、少しは回復の兆しがありリハビリ施設のある病院へと転院しました。

しかし、口からの飲食が困難なため、鼻チューブでの栄養補給に頼らざるを得ず、今度はドクターから胃ろう手術を薦められ再度決断し手術しましたが、回復には遠い状態であります。毎月、見舞い



に行くたびに、この決断は正しかったのかと思ってしまう。家族としては少しでも回復するのであればとの思いから承諾書に署名しましたが、悩

みました。

医学の発達は素晴らしいものがあります。元気な頃は、来年の父の13回忌までは頑張ると言っていた母ですが、ベッドに寝たきりで意識もはっきりしない、ただ生かされているだけの母を

見ると本人から承諾の取れない手術は果たして必要だったのだろうかと考えてしまいました。

回復の見込みのない手術は医者自身の満足と病院の利益追求だけなのではないのかと思ってしまう。自然のまま死を迎えるのが幸福なのではないのかと思うこのごろです。

今回は重いコラムとなってしまいました。同じ悩みをお持ちの方への一考察となれば幸いです。